

# 私から見た 土地改良

## 大和田順子

## 同志社大学教授

## に聞く

SDGsを先取りし、ロハス(LOHAS)をアメリカから日本に紹介し、サステナブルなライフスタイルを広める中、世界農業遺産等専門家会議の委員を務めた経験等から、農山村におけるサステナブルな地域づくりを提案し、今は、同志社大学政策学部・総合政策科学研究科においてソーシャル・イノベーションに関する研究と人材育成に携わる大和田順子教授にSDGs時代における土地改良や農山村の方向性についてお話を伺った。

聞き手 ● 丸田雅博

(一社)土地改良建設協会広報委員

みらい建設工業(株)執行役員

写真右 大和田順子氏  
写真左 丸田雅博

### ロハスのコンセプトとは？

**丸田** この度は、インタビューをお受けいただき誠にありがとうございます。本日をとても楽しみにしていました。まずは最初に、これまでのご経歴をお伺いします。

**大和田** もともと社会人のスタートは百貨店に入社し、アメリカなどをウオッチして、新しいライフスタイルの提案や企画をする仕事をしてきました。当時は個人的には西海岸が好きで、オーガニックや自然エネルギーなど大切にしているライフスタイルに憧れていました。

その後、転職したのが環境コンサルティング会社。社長はデンマーク人、社外取締役になりアメリカ人がいて、ロハスという新しいライフスタイルが注目されていると聞き、二〇〇二年にコロラド州ボルダーで開催された「ロハス会議」に参加しました。LOHASとは、ライフスタイル オブヘルス&サステナビリティの頭文字を取ったものです。健康と環境を大切にしているライフスタイルです。

LOHAS会議に参加している人達はアンブレプレナー、社会起業家の卵で、彼らのライフスタイルは、オーガニックなものをホールフーズマーケットで買ってきて食べる、ヨガをして、パタゴニアの服を着て、車はプリ

ウスに乗るといふようなものでした。ああ、これは日本人に好まれるだろうと思いき、紹介する記事を日経新聞に書きました。後にこれが日本にLOHASを最初に紹介したと記事と言われるようになりました。

**丸田** 私も若干関係していますが、東京ご出身で、マーケティングやライフスタイルに関する仕事をされていた大和田先生が、農山村と出会ったきっかけを教えてください。

**大和田** 農山村に出会ったきっかけですが、ロハスは元ヒッピーだった人達が提唱したものでした。ヒッピー達は、オーガニックや自然エネルギー、ローカル経済を重視した社会を創りたいと考えていまして、それを表現するコンセプトがロハスでした。

では、日本で有機農業や自然エネルギー、ローカル経済はどうなっているのだろうか、という問題意識から国内各地取材することになりました。それが農山村と出会うきっかけとなりました。ロハスは、日本の農山村の活性化にも大きなヒントになるのではないかと思います。各地を取材して『アグリ・コミュニティビジネス』という本を出版しました。

例えば、埼玉県小川町「霜里農場」金子美登さんの有機農業や、兵庫県豊岡市のコウノトリ育む農法をはじめ、丸田さんのご案内で宮城県大崎市の「鳴子の米プロジェクト」と



「ふゆみずたんぼ」の取組を取材させていた  
 できました。出版されたのは二〇一一年二月。  
 この取材から、日本の農山村に深く興味を持  
 つようになりました。そして、決定的だった  
 のは、世界農業遺産との出会いでした。  
 二〇一四年四月から六年間、世界農業遺産等  
 専門家会議の委員を務めました。

### 宮城県大崎市との出会い

丸田 そうでしたね。私は大和田先生と出  
 会ってまもなく、農林水産省から宮城県大崎  
 市産業経済部に出向しました。そして、大崎  
 市のことを知れば知るほど、LOHASが目  
 指す「健康、自然への思いやり、持続可能」  
 と言う視点を、大崎市の農業振興、産業振興  
 そして地域づくりに取り入れたいと考えるよ  
 うになり、大和田先生にアドバイスをアイデ  
 アをいただきました。その中で、大和田先生  
 のお陰で総務省の「緑の分権改革調査事業」  
 に採択され、地域づくりのテーマを「自然と  
 人との共生」に選んだことが、現在の大崎市  
 に繋がっていると思います。その後、大崎市  
 は世界農業遺産に認定され、さらに、  
 SDGs 未来都市へと成長・発展しました。  
 感謝しています。大崎市との出会いを今ほど  
 う感じているか。ぜひお聞かせください。

大和田 そうですね。世界農業遺産もさるこ  
 とながら、やっぱり大崎市との出会いは大き  
 いものでした。渡り鳥のおかげですよ（笑）。  
 その渡り鳥が地域の人たちに感謝を言う、葉  
 祥明さん『渡り鳥からのメッセージ』という  
 絵本も制作しましたね。

宮城県北部は、秋から冬にかけてシベリア  
 から一〇万羽の雁など渡り鳥が飛来する日本  
 最大級の越冬地。毎朝毎夕と繰り返し返される「ね  
 ぐら入り」や「飛び立ち」は幻想的で躍動的  
 です。一度見たら忘れることはできません。



「緑の分権改革調査事業」で制作した絵本 葉祥明作



マガンの飛び立ち

「ねぐら入り」の際の落雁（らくがん）は、安藤広重の浮世絵にも描かれていますしね。しかも、この雁は一時絶滅の危機に瀕しました。それを鳥の保護団体や行政、農家が連携して守る体制を作り、生息数が増えていったとお聞きしました。保護活動を実践している地元NPOの人達の取り組みに感動し、この取り組みが知られていないことは、なんとももったいないと思っただけです。例えばコウノトリやトキは有名ですが、渡り鳥のマガ



ふるさと大賞受賞報告 大崎市 伊藤市長とのツーショット

ンはあまり知られていないのでは？と。なんとか知らせたいと思うようになりました。丸田 私も渡り鳥を忘れられないです。今度の冬には是非久し振りに会いに行きたいと思っています。その後、大和田先生は、「SDGs時代における世界農業遺産の役割」という研究テーマで博士号を取得されました。この研究成果は農業・農

村の関係者に評価され、日本各地の地域づくりに生かされています。昨年は、大崎市から「おおさき宝大使」に任命されましたし、大崎市への支援活動は、今年、総務省「ふるさとづくり大賞」総務大臣表彰も受賞される等大活躍です。この研究テーマを選んだ理由を教えてくださいませんか。

## 世界農業遺産の研究テーマで博士号取得

**大和田** 私は、企業でマーケティングの仕事をしていたので、農山村に行った時に最初に感じたことは、マーケティングの視点が少いと言うことでした。どういうニーズを持ったどんな人に、どのように提供すれば喜ばれるだろうかと。その視点からアドバイスをしていました。

それはそれで効果がありましたが、何かもうちょっと、違う何か。底の浅さというか、物足りなさを感じました。そんな時、知り合った宮城大学の風見正三先生から、「大学院に来て、もう少し深く学んでみたらどうですか。」とお勧めいただき、宮城大学の事業構想学研究科博士後期課程に入学しました。事業構想学は英語ではプロジェクトデザインです。プロジェクトをいかに社会的な意味のあるものにするかができるか掘り下げてみた

い。それが、入学動機でした。

そして、入学した頃、農水省から一通のメールが来て、世界農業遺産の委員就任を打診されたのでした。二〇一四年四月のことです。その後、学位を取得し、現在、同志社大でソーシャル・イノベーションコースの教員をしています。こちらでも社会人で学び直したいという学生が多く入学されています。また、京都での暮らしはお勧めです。

**丸田** 大学院に行くことを決めた時は、世界農業遺産を研究テーマにすると決まっていなかったですね。

**大和田** 当初は、東日本大震災からの復興をテーマに研究しようと考えていましたが、世界農業遺産の専門家会議の委員として、全国の農山村にわたったことで、SDGs時代に世界農業遺産はどのような役割を担っているのか。という問題意識が大きくなりました。世界農業遺産に認定されているところは、いずれも優れた地域であり、農村振興とSDGsの関わりを考えたいと強く思いました。

**丸田** 世界農業遺産について、どんなことを研究されたのでしょうか。

**大和田** 世界農業遺産に認定されたことによる成果や課題について、当時認定されていた一一の全地域を比較分析しました。また、世界農業遺産の認定地域がSDGsについて、どのように取り組んでいるのかアンケート調査およびヒヤリング調

査を行いました。この調査は昨年も国連大学と韓国農村振興局によって行われた共同研究の際にも改めて行いました。その結果は、図1にあるように、目標2 持続可能な農業、15 陸の生態系について全地域が取り組んでいる。目標4 質の高い教育、12 持続可能な生産消費も増えている（一〇地域）。一方、5 ジェンダー平等はとて低く、13 気候変動、7 クリーンエネルギーもまだまだこれから。

3 健康、8 働きがい・経済成長ももっと重視されているのではないかと思います。二〇一九年と二〇二一年を比較しますと、目標4 質の高い教育や、12 持続可能な生産消費への取り組み地域が増えていることがわかります。地元の子供たちのふるさと学習に農業遺産を取り入れる地域が増えている。また、消費者との連携も重視されているということでしょう。

そして、この調査をしていく中で、土地改良についても分かったことがありましたよ。土地改良というのは水田だけではないですよ。果樹地帯で農道を作ったり、果樹も水が欠かせません。そういう技術があつて、みかんや梅や茶園も成り立っている。防霜ファンもそうです。世界農業遺産の全ての認定地域が

様々な土地改良を行ってきた。農業や農山村に果たしてきた役割を考えると、大区画の水田を作ることはもとより、棚田保全もあるし、多面的機能支払いもそうですね。そういう意味では、いろんな土地改良を行って、その結果として、世界農業

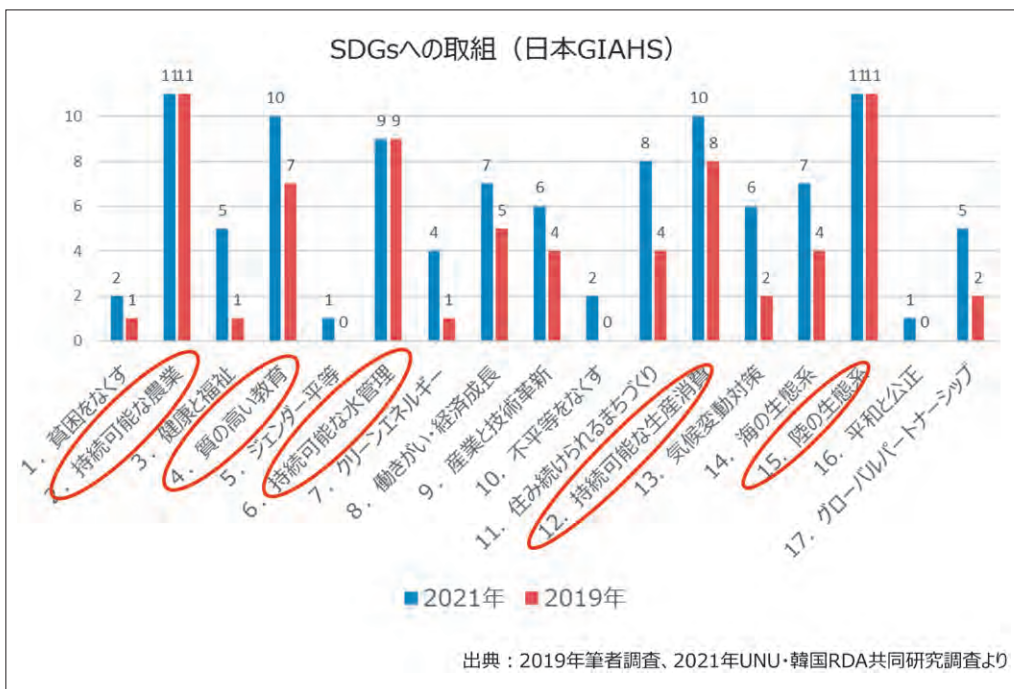


図1 世界農業遺産とSDGs調査

# 世界農業遺産・日本農業遺産 認定基準とモニタリング

## 世界農業遺産の5つの認定基準

- ①食料および生計の保障
- ②農業上の生物多様性
- ③地域の伝統的な知識システム
- ④文化、価値観および社会組織
- ⑤ランドスケープ及びシースケープの特徴

## 日本農業遺産の3つの認定基準

- ①変化に対するレジリエンス（災害時に対する回復力）の保持
- ②多様な主体の連携による地域の資源管理のしくみ
- ③地域ぐるみの6次産業化の推進

## アクションプランの策定と実施



## 認定後のモニタリングと評価

図2 世界農業遺産・日本農業遺産 認定基準とモニタリング

遺産に認定されるような日本固有の農林漁業は形成されてきたのだと、改めて知ることができました。

また、今回のインタビューで私が一番お伝えしたいことの一つは、次はあなたの地域も世界農業遺産に応募してみませんかと言うことです。二年に一回募集しています。農業遺産には五つの基準

がありますが（図2）、その基準に照らして自分の地域の農林漁業を改めて調べることで、それらをつなぐストーリーを考えることで地域固有の農林漁業の姿が浮かび上がってきます。素晴らしい制度だと思います。まだまだ国内にはそういう地域があるはずですよ。

## 世界農業遺産をどう活かすか

**丸田** 同感です。色々な意味で、世界農業遺産をどう活かしていくのか。地域づくりや地域活性化に繋がる横展開が重要ですよ。

**大和田** 世界農業遺産（GIAHS）に関する研究は国内外で、各国の認定地域の特徴、対象農産物、ツーリズム、生物多様性等に関する調査・研究などが、農学、文化人類学、社会学、環境学、経営学など多分野で行われています。

しかし、GIAHSに申請していない地域にGIAHSの考え方を適用し、地域活性化への有用性を検証する研究は未だ行われていません。GIAHSに申請していない地域に、GIAHSの考え方を適用することで、地域固有の価値を可視化し、地域活性

化に有効な方策が導き出せるのではないかと、思うことです。全国津々浦々、農山村にはそれぞれ独自のストーリーがあるはずですよ。それを「アグリヘリテージ・フレームワーク<sup>（注1）</sup>」と仮に呼びましようか。これ活用して可視化する。併せて、SDGsとの関わりを考えることも必須ですよ。そうすれば、自分たちの故郷に固有の価値と、世界の課題への貢献の視点が分かるんです。例えば、今年、同志社大学SDGs研究プロジェクトとして「竹林SDGsを通じたグリーンコモングの創出」に取り組んでいます。京都の乙訓地域の竹林に当てはめて考えてみました。この五つの基準やSDGsの観点から考えることは、どの地域にも適用することが出来ます。

世界農業遺産認定に申請して何が良いかと言うと、自分達の故郷のことを丁寧に調べ直すことだと思っっています。大崎市も最初の申請では認定には至りませんでした、そこで二年後の申請に向けて、認定基準の一つである「ランドスケープ（景観）」について改めて地域を見直し、大崎市にはイグネ<sup>（注2）</sup>がある気が付く。多様な土地の形状に合わせて作られた水田をつなぐ、様々な水利システムがあると再チャレンジが始まりました。別に世界農業遺産の申請に関わらず、こうした考え方で、まず自分の地域を見直してみてくださいと申し上げたいと思います。特に、二番目の基準である「農業上の生物多様性」これがとても重要だと

思います。日常で生きまののの事を考えることはあまりないと思います。

## 「サステナビリティ」が意味するもの

**丸田** ありがとうございます。次に、本日のキーワードである「サステナビリティ（持続可能性）」の言葉に焦点を当てたいと思います。今では、「サステナビリティ」もSDGsも、日常的に話題に上るようになりました。大和田先生がLOHASに取り組んでいた頃と今とでは、この「サステナビリティ」の意味するものは、どのように変わってきたとお考えでしょうか。

**大和田** 当時は「サステナビリティ」と言っても知られていませんでした。これは持論ですが「サステナビリティ」とは、次の世代に対して、思いやりを持って行動することではないかと考えています。それから、先進国だけでなく発展途上国も含め。さらに、人間以外の動物や植物に対して思いやりを持つことだと考えています。

またロハスの健康は、人の健康だけではなく、地域の健康とか、地球の健康というものを併せて考えて、それを実現するライフスタイルだと思います。

**丸田** であれば、大和田先生が、当時、考えていたサステナビリティは、SDGsのサステナビリティとほぼ同じ。でも、世間では、もう少し狭い

意味で浸透してし、商業的に上手に使ってた面もありますよね。

**大和田** 当時の日本のロハスは、地域のサステナビリティのことは皆さんあまり言及されませんでした。健康と環境を大切にされた個人のライフスタイルに限定されている傾向が強かったと思います。ふわっとおしゃべりでエコなライフスタイル。そういうイメージで日本では広がりました。地域や農山漁村への関心が広がっていったのは、もう少し後、東日本大震災以降ではないでしょうか。

## SDGsと農業・農村、建設業界への期待

**丸田** SDGsと農業・農村の話をする前に、頭の整理のため、SDGsの歴史や経緯を復習させていただきます。SDGsとは何なのか、改めてご説明いただけますか。

**大和田** SDGsは持続可能な開発目標ですが、サステナブル・デベロプメントの意味は「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような発展」です。環境関連の目標です。一九九〇年以降、「リオサミットやアジェンタ21を経て、持続可能な発展の考え方が広がりました。一方、MDGs（ミレニアムデベロプメントゴールズ）」という主に途上国の開発関連の取り組みの流れがありました。これらが

統合され、二〇一五年、国連持続可能な開発サミットでSDGsとして採択された経緯があります。

また、SDGsの本質を理解するには、このウェディングケーキ（図3）が重要であると考えます。これは最近、農水省のパンフレット類でも使われていますので、皆さまにもお馴染みではないでしょうか。SDGsの17ゴールを階層化したとき、自然資本は他のゴールの土台となります。水、気候、陸や海の生態系が自然資本です。これらの自然資本から生み出される様々なものを活かすことで、私たちの社会は成り立っています。自然資本を持続可能なものにしなければ他のゴールの達成は望めません。自然資本は、気候、食料、農業と深い関係がありますが、現在一番重視されているのは気候変動対策ですね。

**丸田** ご指摘の通り、気象変動対策は、世界でも日本国内でも、サステナビリティの最大の課題の一つです。農林水産業や企業へ何を期待するか、もう少しお考えを聞かせていただけますか。

**大和田** 多くの企業がCO<sub>2</sub>を二〇三〇年に四六％（二〇二三年度比）、二〇五〇年に一〇〇％削減するという目標を掲げ、具体的な計画を立て、取組を始めています。特に株式公開している企業はTCFD<sup>(注3)</sup>のフレームで取組を公開し始めています。

TCFDは、企業や団体の「気候変動に対する取り組み」を開示するためのフレームです。罰則

# SDGsウエディングケーキ

SDGsの17ゴールを階層化したとき、自然資本は他のゴールの土台となります。自然資本から生み出される様々なものを活かすことで、私たちの社会は成り立っており、自然資本を持続可能なものにしなければ他のゴールの達成は望めません。

出典：農林水産省ホームページ「みどりの食料システム戦略パンフレット」

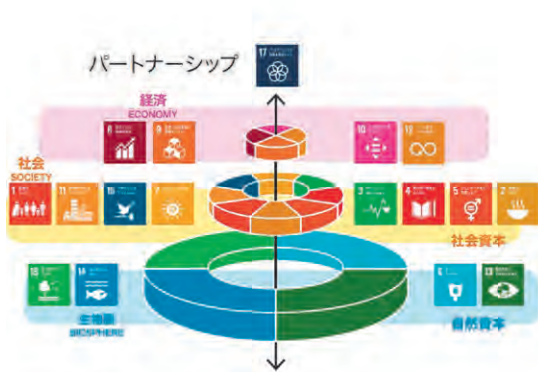


表 SDGsの17目標（三側面からの分類）

| カテゴリー | SDGs17目標   |
|-------|--|
| 経済    | 8 働きがいも経済成長も<br>9 産業と技術革新の基盤をつくろう<br>10 人や国の不平等をなくそう<br>12 つくる責任、つかう責任   |
| 社会    | 1 貧困をなくそう<br>2 飢餓をゼロに<br>3 すべての人に健康と福祉を<br>4 質の高い教育をみんなに<br>5 ジェンダー平等を実現しよう<br>7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに<br>11 住み続けられるまちづくりを<br>18 平和と公正を全ての人に |
| 環境    | 6 安全な水とトイレを世界中に<br>13 気候変動に具体的な対策を<br>14 海の豊かさを守ろう<br>15 陸の豊かさを守ろう   |
| 推進力   | 17 パートナーシップで目標を達成しよう   |

※Stockholm Resilience Centreが制作した「SDGsウエディングケーキ」と呼ばれる図を参考に筆者作成。目標はSDGsのアイコンに記載されているキーワードを番号順に記載。

図3 SDGsウエディングケーキ

は無いのもの、来年は公開が義務化されるという見込みということもあり、各社対応を急いでいます。ESG投資なども普及しており、株主や金融

機関がしつかりと監視しているとも言えます。翻って農林水産業はどうでしょう。気候変動対策として、農林水産業に関わるCO<sub>2</sub>排出量は割合としては少ない。

二〇五〇年までに農林漁業由来のCO<sub>2</sub>もゼロにするという目標が公表されていますが、二〇三〇年にはどれくらいを見込んでいるのでしょうか。

自治体や土地改良区の役割は大きいと思います。そこで、先日、滋賀県に聞いてみました。「滋賀県として排出しているCO<sub>2</sub>の農林水産業由来は二・五%です。二・五%ですが、それをどうやって二〇五〇年までゼロにするかという計画を立てていますか」と回答がありました。

**丸田** 滋賀県は、どんな計画を立てているのですか。

**大和田** 滋賀県は世界農業遺産にも認定されまし

た（二〇二二年七月認定）。とても細かいことですが、米の中干しの期間を一四日に延ばすとCO<sub>2</sub>の排出量が三割減る。一方で森林でも吸収し、カーボンニュートラルを達成されるということです。

今、環境省ではゼロ・カーボンシティーという登録制度をつくっていて、二酸化炭素排出ゼロを表明する自治体を応援しています。対応が早い市町村や都道府県単位で農林業のCO<sub>2</sub>ゼロの計画を立て、取り組み始めている時期だと思っています。市町村とか土地改良区が二〇三〇年と二〇五〇年の計画をしっかりと作って管理することが必要ですね。

**丸田** 企業も本格的にSDGsに取り組みようになり、先進事例も出て来ています。CSR（企業の社会的責任）として積極的に取り組んでいる企業も多くあります。こうした中、建設業について、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

**大和田** 環境白書では、脱炭素、資源循環と自然共生というか生物多様性が三つの柱になっています。企業としてこれらをどのように自社の事業を当てはめていくかです。

それで言うと、建設業界もCO<sub>2</sub>ゼロを目標に未来都市の建設や再生可能エネルギー等色々と取り組んでいますね。それに加えて、コンクリートをいかに循環するかということも重要だと思えます。大きな建設会社ではコンクリートの循環を研

究している会社もあるそうですね。コンクリートからコンクリートを作る技術を開発し資源循環をしなければいけないんじゃないかと思えます。

JEPPLAN（旧日本環境設計）という会社の会長のお話をお聞きして驚きました。ペットボトルをペットボトルにする。ポリエステルの洋服を製造する。大掛かりな工場設備で循環を実現していません。会長曰く、もうすでに地上にあるものを全て循環させればいいんです、新しい原料を使う必要ありません。いかに純度の高いリサイクルを実現するか、日本はそのような技術は得意ですね。

また、三つ目の自然共生に関しては、河川に関しては自然工法がありますね。コンクリート三面張水路を無くすといった。海もなんとかならないでしょうか。沿岸部は近年海の生き物が減りましたが、ブルーカーボンも注目されていますね。海中でどうやって海藻を増やすか。海藻が生育しやすいコンクリートもありますね。SDGs未来都市でもブルーカーボンに取り組んでいる自治体があります。

こう考えると、建設業界においても、「復元」や「再生」がこれからのキーワードではないでしょうか。例えばトキが増えてきたので佐渡以外の地域に放鳥する計画があります。能登の人たちも、是非、石川県で手を挙げていますね。そのため

には、トキが餌にこまらないような農業を行い、トキが生息できる水田環境を復元しなければならぬ訳です。また、西日本ではコウノトリをみんな大好きですね。こちらも環境を復元・再生しないとコウノトリは来てくれません。有機農業の面積も増えていくでしょうね。

三〇年前になかったもので、今あるもの、例えばインターネットやスマートフォン。今、私たちの生活でインターネットやスマホがないとは考えられませんね。三〇年後はそれぐらいにドラスティックに変わっているはずなんですよね。化石由来燃料がなくなったから使わなくなるんじゃないかと、あるけれども、もう使わないというようにシステムを変えていかなければならないのではないのでしょうか。

### 「みどりの食料システム戦略」に期待する

**丸田** 大切な提言をありがとうございます。さて、日本の農業・農村への話題を展開させていただきます。昨年五月、農林水産省は、「みどりの食料システム戦略」を策定し、農業の生産性向上と持続性の両立の実現を目指していくこととしています。日本の農業・農村のサステナビリティはどうでしょうか。

**大和田** 「みどりの食料システム戦略」については、有機農業や地産地消を支持してきた身として

は大変期待しています。海外から肥料が入れられなければ、国内で調達しなければならぬ。下水汚泥由来の堆肥をペレットにして流通させるという話も聞きます。江戸時代には循環型の農業が行われていましたし。「みどりの食料システム戦略」が掲げる有機農業面積二五％は難しいと言っている人もあるようですが、すでに取り組んでいる地域や農家に学べば可能ではないかと思えます。

例えば、埼玉県の小川町、面積は小さいですが、有機農業に町全体が取り組むことで差別化できています。金子美登さんの存在が大きかったわけですが、集落全体が有機農法に転換し農林水産祭天皇杯も取られています。その後、町として基準や制度を作り、有機農業を推進しています。

また、企業ですが、金沢大地をご存知でしょうか。石川県です。世界農業遺産に認定されている能登半島でも圃場を有しています。一企業で一八〇ヘクタール営農されていますが、うち一五七ヘクタールがオーガニックです。麦大豆米、加工もしていて海外にも販売しています。二〇一八年にはワイン醸造やフレンチレストランを開店し、売り上げは五億円ほどです。

また、もっと農山漁村地域への国民の関心を高める方策として「農泊」「関係人口」に引き続き注目したいと考えています。農林水産省の「都市農村共生・対流事業」や「農泊推進対策事業」には複数の地域で関わってきました。



同志社の学生の話をしみると、都市部の学生は本当に農山漁村を知らない。体験したこともない。例えば「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」という授業では、映像を多用して農山漁村でのローカルSDGsの取組を紹介しています。「NHK地域づくりアーカイブス」というホームページがあります。そこに掲載されている埼玉県小川町の有機農業、北海道下川町のバイオマスの熱利用、岐阜県石徹白町の小水力発電や地域づくり等の映像で学んでいます。実際にフィールドにも出かけて課題解決方法について考えてもらっています。

## SDGsの視点で土地改良を考える

**丸田** 改めて、SDGsと土地改良を話題にしたいと思います。日本は、弥生時代に稲作が伝わって以来、かんがい排水、農地整備、環境保全などの土地改良が行われてきました。SDGs時代において、大和田先生が土地改良関係者に望まれることは何でしょうか。

**大和田** ハード面では豪雨による水害の減災対策、田んぼダム、遊水地などの気候変動への適応策。生物多様性の保全・再生にも、これまで以上に取組んでいただきたいと思います。そして、ソフト面も含めて、これからのキーワードは繰り返しになります。再生、復活だと考えています。ま

表 農山村におけるSDGsの目標と主な取り組み

| 目標  | 主な取り組み  |
|---|---|
| 1 貧困をなくそう                                   | ・低所得世帯向けセーフティネット<br>・小規模食料生産者の農業生産性及び所得の増加  |
| 2 飢餓をゼロに：持続可能な農業                            | ・主要農林産物、在来作物、6次化の促進<br>・環境保全型農林業の推進<br>・各家庭・学校・コミュニティ菜園など食料自給                         |
| 3 すべての人に健康と福祉を：健康増進                         | ・主要農産物の健康機能の活用<br>・多世代による相互福祉、高齢者の生きがい創出  |
| 4 質の高い教育をみんなに：<br>次世代の育成、技術的・職業的スキルの獲得      | ・固有の農林業技術研修<br>・起業支援<br>・次世代（子供たち）へのふるさと学習<br>・持続可能性学習                                |
| 5 ジェンダー平等を実現しよう：女性の能力強化                     | ・女性の能力強化・活躍支援<br>・男性の家事・育児参加  |
| 6 安全な水とトイレを世界中に：<br>統合水資源管理、水に関連する生態系の保護・回復 | ・水利施設のコミュニティによる協働管理・保全<br>・山地・森林・河川・湖沼等を含む水に関する生態系の保護・回復活動                            |
| 7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに                       | ・小水力発電、バイオマスの熱利用・発電<br>・ソーラーシェアリング<br>・農山村エネルギーミックスによるエネルギーの地域内自給力の向上                 |
| 8 働きがいも経済成長も                                | ・地域資源を活かした事業・起業・雇用促進<br>・農泊、グリーンツーリズム<br>・持続可能な観光業<br>・農山村のワーケーション活用・地域循環経済形成         |
| 9 産業と技術革新の基盤をつくろう：<br>強靱（レジリエント）なインフラ整備     | ・資源循環型産業<br>・田んぼダムや農業の多面的機能を活かした防災・減災（グリーンインフラ）<br>・農林漁業へのICT・AI活用                    |
| 10 人や国の不平等をなくそう                             | ・地域経済促進<br>・地域住民の能力強化、所得向上  |
| 11 住み続けられるまちづくりを                            | ・持続可能な移動システム<br>・総合的な災害リスク計画<br>・農山村景観保全・再生活動<br>・関係人口による支援、都市農村交流                    |
| 12 つくる責任つかう責任：持続可能な生産消費                     | ・持続可能な生産消費のしくみ<br>・持続可能&自然と調和したライフスタイルの普及   |
| 13 気候変動に具体的な対策を                             | ・気候変動対策、適応策の実施<br>・全事業、暮らしのCO <sub>2</sub> の削減  |
| 14 海の豊かさを守ろう：海洋資源の管理                        | ・海洋、沿岸、河川の水産資源管理<br>・生態系保全・回復   |
| 15 陸の豊かさをももろう：<br>陸の生物多様性 持続可能な森林           | ・森林、湿地、山地、田畑および周辺地域の生態系の保全・回復・持続可能な利用と行政計画立案<br>・絶滅危惧種の保護<br>・外来種の駆除<br>・農業生態系保全・普及活動 |
| 16 平和と公正をすべての人に                             | ・多様なステークホルダーの参加による対話と協働、意思決定のためのプラットフォームづくり<br>・取組の情報公開など透明性を確保                       |
| 17 グローバルパートナーシップで目標を達成しよう                   | ・国内外での持続可能な地域づくりの経験・知見の共有   |

出典『SDGsを活かす地域づくり』より

た、SDGsの目標達成に向けて、日本の経験は海外でも活かすことができるもので、これらのノウハウの共有も期待しています。

また、学位論文に書きましたが「農村協働力」にも注目しています。農水省では平成二十八年度「新たな土地改良長期計画」が策定され、社会的共通資本としての農村、土地改良事業の特徴と社会的役割が整理されており、農村を、農地や土地改良施設といった「社会資本」、生態系や農村景観といった「自然資本」、農家や地域住民といった「人的資本」と捉えています。これら三つの資本を結び付けるものとして、水管理といった共同作業に由来する制度や慣習の中で築かれてきた様々な農村コミュニティの力である「農村協働力」に注目しています。これからの時代、一層重要になってくると思っています。

## 新刊本の紹介とSDGs未来都市

**丸田** 三月に出版された『SDGsを活かす地域づくり』についてお聞きしたいと思います。SDGsのモットーは「誰も取り残さない」ですが、どんな協力体制を構築し、SDGsにアプローチをするべきでしょうか。

**大和田** この本を読んで、うちの地域ではどんなことができるかと考えていただきたいと思います。地元企業、中小企業や商店街の事例が載っています。

す。あと工務店とか地域交通、人材育成などについても取り上げています。具体的な取り組みや、コーディネートのポイントがこの本の特徴です。右の表は農山漁村での取り組み項目を整理したものです。参考にしてください。

また、「誰も取り残さない」という観点から説明すると、経済、社会、環境の三側面それぞれに組み込み、それらをいかに統合的に捉えるかという点が重要です。そして、いかに様々なステークホルダーが参画できるかが求められます。

「SDGs未来都市」認定制度が二〇一八年に開始され五年目になります。SDGsの肝は、この経済・社会・環境に三側面から課題を整理することと、三つをつなぐ取組を行うということです。今年度「SDGs未来都市」に認定された大崎市を例にあげると、大崎の場合は「生物多様性」、生きものと共生する農業や暮らしを核とし、三側面を統合する取り組みとしてステークホルダーのプラットフォーム形成、生物多様性の定量化を行

うプロジェクトを提案しました(図4)。大崎市の二〇年以上にわたる生物多様性の取り組みは国内有数です。渡り鳥の保護活動や自然共生型農業、農泊を軸にした世界農業遺産ツーリズム等に真摯に取り組んできました。

## 若者にとってのSDGs、人材育成、ソーシャル・イノベーション

**丸田** 大和田先生は、現在、同志社大学総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコースで教鞭をとられています。学生達若者にどんな情報やメッセージを送っていますか。また、学生の反応やアクションはどのようなものですか。

**大和田** 学部は政策学部で、一学年四〇〇人です。学部の「NGO、NPO論」という科目は三〇〇人ほどが履修しています。秋学期の「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」という授業は今年六〇人の履修登録があります。フィールドワークに行き、その地域課題を解決する具体策を考えたもらいます。地域やフィールドワークに興味のある学生は結構います。

政策学部生の進路は公務員、金融機関、企業などです。SDGsに関心のある学生が多いので、SDGsの基盤となっている自然資本は農山漁村にあること。日本の農山漁村は魅力がある。日本の宝だと。留学する学生も少なくありませんが、



「SDGsを活かす地域づくり—あるべき姿とコーディネーターの役割—」  
白井信雄、大和田順子、奥山陸(編著)  
晃洋書房

# 大崎市・SDGsモデル事業の概要

家の前(くに)おおさき・浜城大崎市



世界農業遺産（GIAHS）とSDGs目標を連動させ、喫緊の諸課題に対し、多様な主体の参画により、カーボンニュートラルな食料生産、生物多様性の向上（ネイチャー・ポジティブ）、グリーンインフラによるレジリエンス、GIAHSツーリズムなどに関し、「人」、「知恵」、「資源」のつながりの再構築により、新たな付加価値を創出し、持続可能な地域づくりを実現する。



図4 大崎市・SDGsモデル事業の概要

日本のことを知るこ  
とが重要だと話をし  
ています。特に世界  
農業遺産はその価値  
が世界に認められた  
ものですので、それ  
を教材にしています。  
また、日本で創出  
された課題解決のス  
キルやノウハウは海  
外でも活用可能な場  
面が少なくないと思  
います。国内で成果  
を上げた手法を海外  
に展開する意義など  
も紹介しています。

**丸田** 関連でお聞き  
したいのは、若者達  
の職業観や職業意識  
とSDGsとの関係  
についてです。いか  
がでしょうか。

**大和田** 学生の授業  
の感想をいくつか紹  
介しますと。

例えば、「元々、  
SDGsに興味があ  
ったので、SDGsの目標や課題解決にむけて  
率先的に行動していく市町村など地方自治体は非  
常に魅力的だし、SDGs未来都市として認定す  
ることは非常に良い取り組みであると感じました。  
この認定制度があることによって、経済面や社会  
面、環境面に配慮した取り組みをしようとする地  
域が増えていき、日本全体に広まっていけば、ま  
すます相乗効果となってSDGsの目標達成につ  
なげられるのではないかと思った。」

また、こんな感想もありました。「企業の  
SDGsのお話は就職活動を始めた私にとってと  
ても勉強になりました。就職活動では、経営の基  
盤だけではなくSDGsなど企業としての社会責  
任を果たしているかどうかも基準の一つとして考  
えていきたいと思っています。」

その他にも、「この講義では多種多様な人が地  
域活性化やSDGsに貢献する社会的事業につい  
てお話しをしてくれました。楽しかったし得るも  
のが多く、沢山のことを吸収することができまし  
た。」

**丸田** ありがとうございます。若者達に期待して  
も大丈夫ですね。楽しみになってきました。最後  
に、ご専門にされているソーシャル・イノベーション  
の観点から、これからの社会の在り方について  
ご提言をいただければとお願いいたします。

**大和田** ソーシャル・イノベーションとは、「す  
べての人々にとって暮らしやすい社会を作り上げ

るために、これまでのアプローチでは解決できなかった問題に対して、新たな方法で革新的に課題を解決するとともに、その変革を社会全体に広げることの意味する。」ものです。

最初にお話ししましたが、地域のアグリヘリテージを深掘りし、地域固有のストーリーを可視化するとともにSDGsへの貢献について考えを、実践することがとても重要だと思えます。これを、アグリヘリテージ・フレームワークと呼んでいます。また、日本は国土の七割近くが森林、海に囲まれていて、国全体が生物多様性にとっても富んで



同志社大学志高館にて（烏丸キャンパス）

います。その島でカーボンニュートラルを実現し、世界に示してはいかげんかでしょうか。そして、河川同様、沿岸域も再生し、コンクリートも全て循環するような、そんなソーシャル・イノベーションで、持続可能性を高めていくことを心から期待します。

**丸田** SDGsの目標達成のため、スマート農業のための基盤整備、強靱な国土づくり、再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会、生物多様性の保全等に取り込んでいく必要があります。これまで以上に、土地改良関係者に対しご指導・ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

本日は、貴重な情報やアドバイスをいただき、ありがとうございます。益々のご活躍をお祈りしています。  
(令和四年七月二十五日)

(注1) アグリヘリテージ・フレームワーク

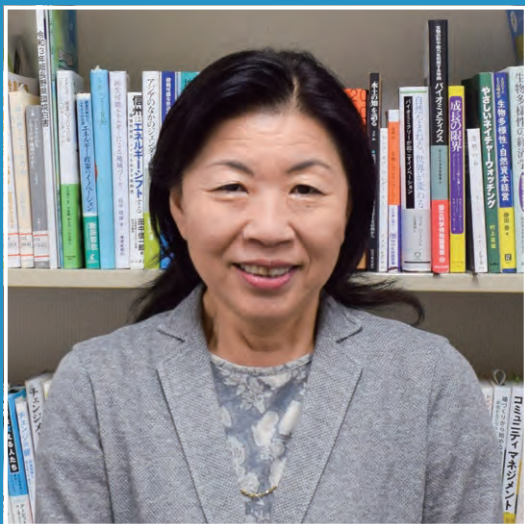
五つの基準…①食料および生計の保障、②農業生物多様性、③地域の伝統的な知識システム、④文化・価値観及び社会組織、そして⑤ランドスケープ及びシースケープの特徴である。これらを統合して地域固有のストーリーを描き、その農林水産業システムを顕在化させるとともに、SDGsの目標達成に貢献する保全・活用計画を作成する一連のプロセスを「アグリヘリテージ・フレームワーク」と名付ける。

(注2) 居久根（いぐね）

風雪から家屋敷を守るためや食料や建材、燃料として利用するために敷地を取り囲むように植えられた屋敷林。

(注3) TCFD

気象関連財務情報開示タスクフォースのこと。企業の気候変動への取組みや影響に関する財務情報についての開示のための枠組み



おおわた じゅんこ  
**大和田 順子** 同志社大学政策学部 教授

東京生まれ・育ち 2021年4月から京都市在住  
1982年東急百貨店、東急総合研究所等でマーケティングの実務を経て2006年独立。2002年に日本にLOHAS（ロハス）を紹介。2009年～全国各地で世界農業遺産、生物多様性、SDGsを活かした“持続可能な地域づくり”に参画。  
農林水産省・世界農業遺産等専門家会議 委員（2014年4月～2020年3月）、一般財団法人日本水土総合研究所理事（2020年4月～）、2020年9月、宮城大学大学院事業構想学研究科博士後期課程修了、博士（事業構想学）。2021年4月から現職。2022年1月総務省「ふるさとづくり大賞」個人表彰総務大臣表彰を受賞。主な著書：『アグリ・コミュニティビジネス』（2011年、学芸出版社）、『ソーシャル・イノベーションの理論と実践』（共著 2022年、明石書店）